

NEWSLETTER



大阪女学院大学 大阪女学院短期大学

教 員 養 成 セ ン タ ー

- 巻頭エッセイ 心に沁みる「ことば」..... 1
- 特集：「教員免許状更新講習 2010」..... 2
 - ・ 論理的思考力や表現力を高める英語授業デザイン1 2
 - ・ 論理的思考力や表現力を高める英語授業デザイン2 3
- 授業の玉手箱 「教室に時事英語を」..... 4
- 書籍紹介 『外交官の「うな重方式」英語勉強法』..... 4

巻頭エッセイ

中垣 芳隆

— 心に沁みる「ことば」 —

例年にない酷暑の中で小・中・高等学校では2学期がスタートしました。厳しい残暑に早く秋風が取って代わってくれるのを心待ちに、先生方のご自愛を願います。

日中の暑さに抗しがたく、TVを友とするうちに、梅津アナウンサー扮する「ことばおじさん」の軽妙な語り口に酔いながら、そういえば我が国は「言霊の幸ふ国」すなわち「ことばに宿っている不思議な力と働きによって幸福をもたらす国」であるのかとて教わったことを思い出すとともに、ことばの持つ力の例示として、デルフォイのアポロ神殿に刻まれていたという「汝自らを知れ」という格言についても教わったことを思い出しました。「かの毒杯をあおったソクラテスは、この格言に導かれ、当時のアテナイの人々が金銭や名声を求めることばかりに気を配り、『魂』をすぐれたものにするに気を配らないでいることを問題にし、そのことを徹底的に批判した。『魂』への気遣いを忘れるなら、何のために生きているのかという生の意味自身が不明になると考えたからである」と講義いただいたように記憶しています。

さて、この夏は教職課程の集中講義で「大村はま氏のことば」を扱う機会を得ました。著書「灯し続けることば」を通しての、同氏の思想、考え、大切にされていたこと、生き様に学生達はそれぞれに感銘を受けたようですが、彼らが一緒に感動したのは「優劣のかなた」と題する同氏の最後の詩でした。この詩を作るに当たって、同氏が人生の最後に一番大事にされた「ひたすら」という「ことば」は次の一節にあります。

学びひたり
 教えひたる、
 それは、優劣のかなた。
 本当に持っているもの
 授かっているものを出し切って、
 打ち込んで学ぶ。
 優劣を論じあい
 気にしあう世界ではない、
 優劣を忘れて
 ひたすらな心で、ひたすらに励む。

学生たちは、これまでの学校生活への振り返りからそれぞれに感ずるところがあったのでしょうか、この一節を読むと、かつて勤務した高等学校で出会った高齢の生徒、在日のKさんの「ことば」がオーバーラップします。

そこでは一つのキャンパス空間の中に時間差で2つの異なる全日制と定時制の学校がお互いの文化を尊重しつつ、お互いの存在を主張していました。

定時制課程に学ぶ生徒たちは背景もさまざまなら、年齢も10代から70代までとまるで社会の縮図でしたが、高齢の生徒さんたちが一人の例外もなく、校門をくぐるときに「今日もよろしくお祈りします」下校時には「ありがとうございました」と立ち番の先生に挨拶をされるのは驚きでもありました。

当時70歳手前だったでしょうか、Kさんと心やすくなりました。クニに帰るたびに「校長先生おみやげ持ってきた。食べて」とキムチを差し入れてくれたものですが、ある時、彼女に「Kさんもそうだけど、年齢の高い人が、暑い日も寒い日も休むことがないのはなぜ？」と問いかけましたら、「私はな。戦争中は学校に行きとて行くことが出来なかったので、頭が栄養失調やね。若い子らには簡単なことでもこの歳になると難しい。せやけど、今日一つ勉強して、ちょっとでもかきこなれることが嬉しいね。それに、私らにわからせよ思うて先生らが一生懸命教えてくれるのに休むことはできんよ」。

時代の流れの中で、定時制課程は、72年のその歴史に幕を下ろしましたが、定時制課程では教育に関わる者が忘れてはならないことを、生徒さんを通して随分と学ばせてもらいました。その余のことについては機会をいただくことがあれば、またお伝えしようと思います。



教職課程夏季特別講習「教育と人間」 中学校・高等学校現職の先生による講義